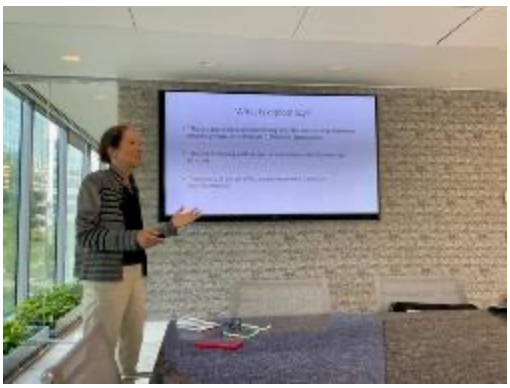
ワシントンで働く女性の会（J-WIP）第 22 回 活動報告

企画担当理事：森下 由季子

2023 年 9 月 12 日、ワシントン DC で働く女性を応援する J-WIP による第 23 回目のスピーカーイベントを開催致しました。講師としてお迎えしたのは、元外交官、今は俳人・作家としての顔をお持ちのアビゲール・フリードマンさん。日本人の心を表す俳句をこよなく愛し、日本と米国の文化・外交の架け橋としてこれまで活躍してきたアビゲールさんのお話に参加者の皆さんは感銘を覚え、同時に背筋もピンとなったのではないでしょうか。「米国人がこれほど日本を学び、理解を深めようと日々努力を惜しまないでいてくれる」ことをお聴きし、ワシントン DC で暮らす私たち日本人一人ひとりこそ、自国の文化を当地で伝えていくべきではないかと思われた方も多かったかと思います。



アビゲールさん

アビゲールさんは、外交について、「国家・集団・個人それぞれの単位での平和的関係を維持するための技術と科学」あるいは「繊細かつ効果的な方法で人々と接する技術」と引用を用いてご説明され、リスクにさらされる環境で強い意志と行動力、そして好奇心を持って任務を遂行する経験談は、誰もが息を呑む内容でした。国務省では、東京、ボスニア・コソボ、パリ、ケベックでの駐在ほか、アフガニスタン東部の米軍に派遣された民間人の中の最高幹部として勤務、その後、オバマ政権時代には、国家安全保障会議のアフガニスタン担当理事を務めるなど、絶え間ない緊張感の中で、仕事は選ばずにどこに派遣されても自分にとっては、チャレンジだと前向きに受け止め、与えられた任務にガッツと好奇心を持って取り組んできたという言葉が大変印象に残っています。

会場の雰囲気

また、3 人の母として、夫のサポートを受けながら、仕事と生活の両立をやり遂げたご苦労は、参加者女性にとってとても心に響く内容だったのではないでしょうか。

外交官として、北朝鮮問題に取り組んでいる最中、極度な緊張が求められる場面が多い中で、ホッと息をつけたのは俳句との出会いだったとのこと。帰宅してから難しい本を読むのではなく、5・7・5 の俳句を日本語で読むことが心身ともに癒された時間だったと過去を振り返ってお話くださいました。今では俳句がご自身のウェルビーイングに欠かせないほど毎日の中核になっているそうです。

アビゲールさんが師事したのは俳人の黒田杏子（ももこ）さん。20 年前に自ら日本語で「私の俳句の先生になってください」と手紙を書いたそうです。その後、富士山麓で定期的に開催される句会に参加し、多くの俳句を楽しむ日本人との出会い、黒田先生との思い出など、お話くださいました。俳句を創ることは、静かに言葉と言葉を織りなす作業。これは、国と国、人と人の関係性から外交戦略をじっくり考えることにも繋がり、非常に有益であるとお話されました。

日本語の俳句は、季語、5・7・5、切れ字といったルールがありますが、英語俳句は、簡潔性、季節感を求められるものの、自由に創る三行詩です。俳句は、日本からまず最初にイギリスに 19 世紀初頭、明治時代に渡り、100 年の歴史を経て、今では世界各国で俳句を楽しむ人が増えているそうです。また各国によって俳句のスタイルが異なるところがユニークな点です。

アビゲールさんは、ワシントン DC 日米協会の俳句グループの講師も務められていらっしゃいます。ご興味のある方は一度、参加されてみてはどうでしょうか。

最後に、アビゲールさんが作られた英語俳句をご紹介いたします。

buried under
the Plains of Abraham
Iroquois cries

Abigail Friedman

英仏対立のターニングポイントになった 1763 年のフレンチ・インディアン戦争におけるエーブラハム戦場跡地での句。その地に眠るイロコイ族を偲ぶ句は兵たちへの想いと重なります。

※J-WIP(Japanese Women in the Professions in Washington DC)
ワシントン地区で働く日本女性へのキャリア育成支援活動。2016 年 1 月から、ワシントン日本商工会として支援。

以　上